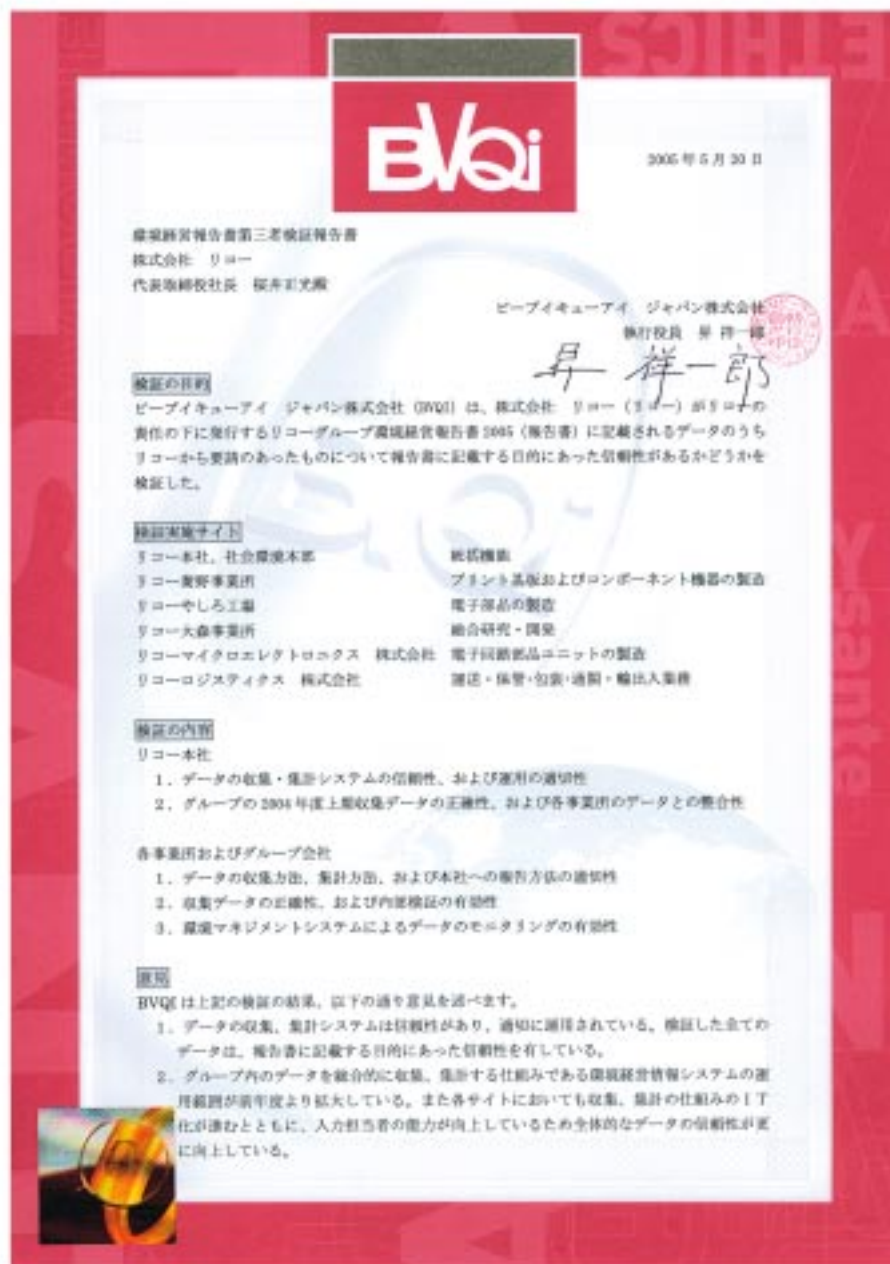


リコーグループは、環境パフォーマンスデータとその収集・集計システム(環境経営情報システム)について第三者検証を受審し、環境経営報告書を通じてステークホルダーの皆様へ情報を開示しています。また検証結果を環境経営の改善・進歩のために役立てています。2004年度は「システム検証」の考え方を取り入れました。データ間の整合性に加えて、システムが信頼性の高いデータを収集・集計するために有効に機能しているかどうかを検証されています。今後も、第三者検証をより有効に活用し、継続的な改善を進めていきます。



参考所見(全文)

BVQIはデータの検証過程で、リコー社会環境本部および検証実施サイトに環境活動についての気付きや意見を報告してきた。それらの報告を含めて所見は以下の通りである。

1. 良かった点

- 環境経営情報システムは、使用する係数を事業所任せではなく本社が一括して管理しているなど信頼性の高い運用が行われている。
- 製品リサイクルのリサイクル率の計算が、部品単位で正確に実施されている。
- リコーロジスティクスの環境レポートシステムは、全国のデータを正確に収集、集計できる信頼性の高いシステムである。

2. 今後の課題

- 一部の非生産グループ会社においても、環境経営情報システムのより一層の展開が望まれる。担当者によるデータ入力については、入力ミスを起こす可能性が低く、かつミスを容易に発見できるシステムへのレベルアップを希望する。

■ BVQI 検証済データ一覧

ページ	番号	名称	検証番号
13	—	リコーグループ環境行動計画 (2002年度~2004年度)/結果	(1)
19	①	《日本》エネルギー消費量の推移 白黒複写機・複合機	(2)
	②	《日本》エネルギー消費量の推移 カラー複写機・複合機	(3)
	③	《日本》エネルギー消費量の推移 白黒・カラープリンター	(4)
	④	《日本》エネルギー消費量の推移 ファクシミリ(複合機含む)	(5)
	⑤	《グローバル》QSU技術による CO ₂ の削減量	(6)
23	①	《グローバル》再資源化率 複写機	(7)
	②	《グローバル》再資源化率 トナーカートリッジ	(8)
	③	《グローバル》回収実績 複写機の回収台数	(9)
	④	《グローバル》回収実績 トナーカートリッジの回収質量	(10)
24	⑤	前身機(新造機)と再生機のLCA比較 (CO ₂ 排出量)	(11)
27	①	《グローバル》製品1台あたりの化学物質使用量推移(2000年度比)	(12)
	②	《グローバル》カラー機使用時における騒音推移	(13)
	③	《グローバル》製品の環境影響化学物質排出基準達成状況	(14)
33	①	国内リコーグループ(生産)の2010年度に向けてのCO ₂ 排出総量削減目標達成のシナリオ	(15)
34	②	《日本》エネルギー使用量 リコーグループ(生産)	(16)
	③	《日本》エネルギー使用量 リコーグループ(非生産)	(17)
	④	《日本》主要なエネルギーの使用量内訳 リコーグループ(生産)	(18)
	⑤	《海外》エネルギー使用量 リコーグループ(生産)	(19)
	⑥	《リコーグループ全体》CO ₂ 以外の温室効果ガス排出量(CO ₂ 換算) リコーグループ(生産)	(20)
	38	①	リコーロジスティクス輸送におけるNO _x 、SO _x 排出量
39	①	《リコーグループ全体》廃棄物総発生量 リコーグループ(生産)	(22)
	②	《リコーグループ全体》水の使用量 リコーグループ(生産)	(23)
40	③	《日本》廃棄物再資源化率/総発生量/総排出量/最終処分量 リコーグループ(生産)	(24)
	④	《日本》廃棄物再資源化率/総排出量/最終処分量 リコーグループ(非生産)	(25)
	⑤	《海外》廃棄物再資源化率/総発生量/総排出量/最終処分量 リコーグループ(生産)	(26)
43	①	《リコーグループ全体》2004年度環境影響化学物質の使用・排出量 リコーグループ(生産)	(27)
	②	《リコーグループ全体》リコー削減対象物質の使用量・排出量推移 リコーグループ(生産)	(28)
	③	《リコーグループ全体》公害防止関連項目 (NO _x , SO _x , BOD)の排出量推移 リコーグループ(生産)	(29)
46	①	リコーグループ国内生産関連事業所 地下水汚染調査結果と浄化状況(2005年3月現在)	(30)
	②	リコーグループ海外生産関連事業所 地下水汚染調査結果と浄化状況(2005年3月現在)	(31)
51	—	事業活動全体のエコバランス(2004年度)	(32)
55	—	2004年度 リコーグループのコーポレート環境会計	(33)
77	—	サイト別データ	(34)

- BODの排出量は、各事業所での環境側面により計測しているものを集計しており、リコーグループとして測定対象が統一されていなかった。測定対象の統一が望まれる。
- 環境会計の入力において、殆んどが税抜きの値を入力していたが、税込みの値を入力している事業所があった。統一のルールが必要。

- 廃棄物の収集は、削減活動の一環として部門単位で計量している場合があり、その合計値と廃棄物業者の値に大きな差異が見られた事例があった。差異を小さくする努力が必要である。

3. 温室効果ガス排出量

- 京都議定書の発効に伴い、今後は、国際標準に準拠した排出量の算定方法による結果を公表し、信頼性、透明性を確保することが望ましい。
- 使用する各種換算係数の一部に不整合もしくは最新でないケースが存在するなどの問題点が散見された。